カンタベリーへの旅の友

加島巧

A Companion to Canterbury

KASHIMA Takumi

Abstract

Geoffrey Chaucer, who is often called "Father of the English Poetry," was born and brought up in London. The family were merchants in Ipswich but his grandfather and father were London vintners. Chaucer had multiple facets not only as an author or a poet, but also as a bureaucrat and a diplomat. His *Canterbury Tales* is a collection of stories told by fictional pilgrims on the road to the cathedral at Canterbury. At the beginning of his *Canterbury Tales*, he introduces 30 pilgrims. In this paper, the author collected materials which enable readers to understand Chaucer's *Canterbury Tales*, especially 'General Prologue.'

1. 序

英文学の祖と称されるジェフリー・チョーサーは 1343 年頃に生まれた。彼の家は、元々はイングランド東部サフォーク州のイプスウィッチの豪商であった。祖父と父はロンドンの豊かなワイン商人の家に生まれた。チョーサーは上流階級の仲間入りをし、廷臣、外交使節、官吏としてエドワード3世(1327 - 77)、リチャード2世(1377 - 99)に仕えた。エドワード3世に仕えていたときには、フランスで捕虜になったが、王が身代金を払い釈放されている。このことからもチョーサーが王室と深い関係だったということがわかる。後に王妃の妹の夫であったジョン・オブ・ゴーント(1340 - 99)がパトロンとなる。ここで、小説家エドワード・ラザファードに登場してもらい、彼が1997年に書いた『ロンドン』からチョーサーを紹介する場面をまず引用する。

From a humble page, the wine merchant's son had progressed through the various stages of a young gentleman at court, making himself both useful and popular. ... Chaucer had gone on campaign several times, been ransomed once, and studied enough law for any official appointment he might get. He also possessed one other talent: he could turn a pretty verse in French to please a lady or celebrate a great event. Lately, he had even experimented by rendering some verses into the Frenchified version of English spoken at the court – a daring novelty that the royal circle found charming. He had been included in a diplomatic mission, to broaden his experience. And a little while ago he had also received another significant reward.

In the large and sophisticated court of King Edward III, it had become usual to find aristocratic wives for rising young courtier from the middle classes, and Chaucer, the popular wine merchant's son, had been favoured with the daughter of a Flemish knight. "Yet doesn't the fellow have the devil's own luck?" Bull had cried happily. For Chaucer's amazing good fortune was that his wife's sister, Katherine Swynford, was

the acknowledged mistress of no less a person than King Edward's younger son, John of Gaunt.

There were numerous royal son, all handsome fellows who sported the long, drooping moustaches that were fashionable. If John of Gaunt was shorter and broader than his heroic brother the Black Prince, he was still an impressive figure, and almost certainly more intelligent. By his first marriage he had secured the vast estates of the dukedom of Lancaster; by his second, to a Spanish princess, a claim to the throne of Castile. But his real love, to whom he was as quietly devoted as any husband, was Katherine. Geoffrey Chaucer therefore had married into the outskirts of the Plantagenet royal house¹.

チョーサーは公務員としての仕事をしながら、著作に励むが、ここに取り上げる『カンタベリー物語』は彼の代表作である。その冒頭には、858 行の「総序」でカンタベリーへの巡礼に30 名の団体で行く経緯が述べられている。この小論の目的は、「総序」をカンタベリーへの巡礼の手助けとし、さまざまな資料を提供することで、『カンタベリー物語』の理解を深めることにある。1996 年に発表した「カンタベリーへ巡礼の旅に出よう!」の増補版でもある。²

2. チョーサー (1)

序で述べたように、チョーサーの祖父と父は裕福なワイン商人であったが、当時のワイン商人がロンドンの町の中で有力な組織であったことは、Swan Upping という伝統行事から読み取ることができる。
Swan Upping は、Nicholson の *The London Guide* によると、次のように定義してある。

Swan Upping

Starts: London Bridge (Temple Stairs)09:00-09:30. Ownership of the swans on the Thames is divided between the Dyers Company, the Vintners Company and the Sovereign. Each July a census of the swans on the reaches up to Henley is taken, and the cygnets are branded by nicking their beaks. No fixed date³.

テムズ川に住む白鳥は王室と染め物屋組合とワイン商組合が所有しており、それぞれの所有を確かめるために白鳥のくちばしに印をつける行事が夏に行われる。2008年は7月14日から18日にかけて行われた。

http://www.thamesweb.co.uk/windsor/windsor1999/upping.html では歴史や所有者によって異なるくちばしの印などを見ることができる。ロンドンのアッパー・テムズ通りにあるワイン商組合 4 の玄関には白鳥が描かれている。

Guide to English Language & Literature Vol.1 pp.39-57 長崎外国語短期大学

¹ Edward Rutherfurd *London* pp. 442-443 The Ballantine Publishing Group, 1997

この本は、鈴木主税・桃井緑美子訳で集英社から 2001 年に日本語訳が出ているが、その解説は英文学者の小池 滋氏で、この本はフィクションで、ロンドンの歴史ではないし、ロンドンを舞台にした歴史小説ですらないのに、いつの間にかノン・フィクションではないかと思わせると書いている。エドワード・ラザファード著 鈴木主税・桃井緑美子訳『ロンドン』(下) 567 ページ

² 加島 巧「カンタベリーへ巡礼の旅に出よう!-ジェフリー・チョーサーが案内します-」

³ Nicholson The London Guide 10th edition, p.37, 1987

⁴ http://www.vintnershall.co.uk/も面白い。







葡萄酒組合のビルの玄関には白鳥の模様が描かれている

3. 四月そして、聖なる殉教者トーマス・ア・ベケット

- 1 Whan that Aprill, with his shoures soote
- 2 The droghte of March hath perced to the roote,
- 3 And bathed every veyne in swich licour
- 4 Of which vertu engendred is the flour;
- 5 Whan Zephirus eek with his swete breeth
- 6 Inspired hath in every holt and heath
- 7 The tendre croppes, and the yonge sonne
- 8 Hath in the Ram his half cours yronne,
- 9 And smale foweles maken melodye,
- 10 That slepen al the nyght with open ye
- 11 (So priketh hem nature in hir corages),
- 12 Thanne longen folk to goon on pilgrimages,
- 13 And palmeres for to seken straunge strondes,
- 14 To ferne halwes, kowthe in sondry londes;
- 15 And specially from every shires ende
- 16 Of Engelond to Caunturbury they wende,
- 17 The hooly blisful martir for the seke,
- 18 That hem hath holpen, whan that they were seeke.⁵

四月は巡礼の月なのだ。これは世の東西を問わない。日本でもそうだったことは、瀬戸内寂聴が幼いころの思い出を書いている。⁶

四月はまた、イギリス人の待ちに待った月である。*Pocket Oxford English Dictionary* の第6版、もう今では、このような定義はされていないのが残念なのだが、3月と4月の定義をここで引用しておく。

⁵ 『カンタベリー物語』からの引用は、すべて Larry D. Benson (ed.) *The Riverside Chaucer* 3rd. Edition Houghton Mifflin Company, 1987 に拠った。

⁶ 瀬戸内寂聴「遙かなり巡礼の旅」(『太陽』1981年1月号) 平凡社

March: Third month, associated with cold winds:

April: Fourth month, noted for alternation of sunshine & showers:⁷

「総序」の17行にある聖なる殉教者というのは、カンタベリー大聖堂で大司教をつとめていたトマス・ア・ベケット (1118?-1170) のことであるが、かれは、ロンドンのチープサイドで生まれた。現在その場所はチャーチ靴店があり、その入り口の右側には石版が埋め込まれている。ベケットがカンタベリー大聖堂で刺客に暗殺される場面は T.S. エリオット(1888 - 1965)が Murder in the Cathedral(1935)という詩劇で取り上げている。ここでイギリスの小説家エドワード・ラザファードに登場してもらう。彼の『ロンドン』という小説は、紀元前 54 年~ 1997 年までの 10 家族の運命を扱った小説なのだが、この事件のことも触れられている。8



ロンドンのチープサイドにあるチャーチ靴店



チャーチ靴店の入り口右側にある石版

国王へンリー2世 (1133 – 1189) が裁判制度の整備を進める上でクラレンドン法を1164年に制定して、「罪を犯した聖職者は、教会が位階を剥奪した後、国王の裁判所に引き渡すべし」と教会に要求したのに対し、このベケット、カトリック教会の権利と自由を主張し、王と争い、迫害を受けてフランスに逃れた。また、彼の父親はもともとフランスの出なので、ベケットが1173年に聖人となり、1220年に遺体がカンタベリー大聖堂に移されると、カンタベリーへの巡礼者はイギリス国内からだけでなく、フランス、特にノルマンディーからの巡礼者も多かった。9

4. 陣羽織亭 (Tabard Inn)

- 19 Bifil that in that seson on a day,
- 20 In Southwerk at the Tabard as I lay
- 21 Redy to wenden on my pilgrymage
- 22 To Caunterbury with ful devout corage,

⁷ P.O.D. sixth edition 1978

⁸ The murder of Archbishop Thomas Becket took place before the altar of Canterbury Cathedral, at vespers on 29 December in the year of Our Lord 1170. Monastic historians, who at that date reckoned the new year from Christmas Day, often give the year as 1171. The details remain ambiguous. Edward Rutherfurd *London* p.316, The Ballantine Publishing Group, 1997 ⁹ 臼田 昭著『イン イギリスの宿屋のはなし』pp.18–20 駸々堂 1986

- 23 At nyght was come into that hostelrye
- 24 Wel nyne and twenty in a compaignye
- 25 Of sondry folk, by aventure yfalle
- 26 In felaweshipe, and pilgrimes were they alle,
- 27 That toward Caunterbury wolden ryde.
- 28 The chambres and the stables weren wyde,
- 29 And wel we weren esed atte beste.
- 30 And shortly, whan the sonne was to reste,
- 31 So hadde I spoken with hem everichon
- 32 That I was of hir felaweshipe anon,
- 33 And made forward erly for to ryse,
- 34 To take oure wey ther as I yow devyse.

さて、ロンドンはテムズ川南岸にある「陣羽織亭(タバルド・イン)」。Thomas Tyrwhitt が編集し、1857年に出版された『カンタベリー物語』によれば、「この旅籠には、ジェフリー・チョーサーと29名の巡礼者が1383年にカンタベリーへの巡礼の旅へ行くために泊まった。」という碑文があったと「総序」の18行目の註に書いてある。ただし、名前は Tabard から Talbot に変わっている。¹⁰

さて、この章では、まず、Nevill Coghill 編の『カンタベリー物語』にある木版画から。¹¹ これは、元々はウィリアム・カックストンの『カンタベリー物語』第二版にあったものである。

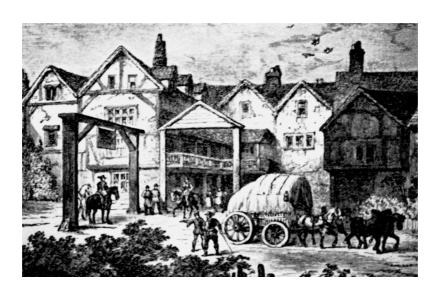


The pilgrims enjoy a boar's head, a fowl and a pitcher of wine.

They who are disposed to believe the pilgrimage to have been real, and to have happened in 1383, may support their opinion by the following inscription, which is still to be read upon the inn, now called the Talbot, in Southwark: "This is the Inn where Sir Jeffrey Chaucer and the twenty-nine Pilgrims lodged in their journey to Canterbury, Annon 1383." (Thomas Tyrwhitte *The Canterbury Tales* London: G Routledge & Co., 1857, p.2)

Nevill Coghill The Canterbury Tales, p. 27 Century Hutchinson, London 1986 This woodcut is originally from William Caxton's second edition of Chaucer's *Canterbury tales*.

次に、2 枚のイラストと1 枚の写真であるが、最初のイラストは、17 世紀の「陣羽織亭」で、基本的にチョーサーの時代と変わっていないとのこと。 12



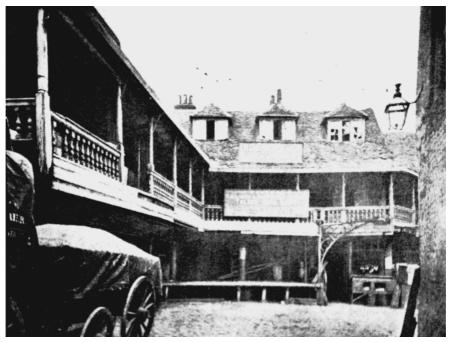
2枚目のイラストは取り壊し前の「陣羽織亭」。 13 最後は写真であるが、1874年の取り壊し直前のものである。2枚目のイラストと同じ場所を撮影しているが、3階の右側の出窓のガラスが割れたままになっている。2階のテラスに掲げられている看板には、鉄道会社の事務所の文字がかすかに読み取ることができる。 14



¹² Peter Haydon *The English Pub A History* p.34 Robert Hale, 1994

¹³ Peter Haydon *op. cit.* p.37 Robert Hale, 1994

¹⁴ Peter Haydon op. cit. p. 330 Robert Hale, 1994



写真左:
テムズ川南岸サザークのバラ・ハイ・ストリートにある
「ジョージ亭」入り口

写真下:
「ジョージ亭」中庭 建物にはテラスがある

カズオ・イシグロの『日の名残り』では、執事のスティーブン(映画ではアンソニー・ホプキンスが演じていた)が退職した女中頭のミス・ケントン(映画ではエマ・トンプソン)をコーンウォールに訪ねる場面がある。途中スティーブンは「馬車屋」という宿に一泊するのだが、時代は1936年に設定されているが、チョーサーの時代の「陣羽織亭」を髣髴とさせる。

昨夜は、サマセット州トーントンの町はずれにある、馬車屋という宿に一泊いたしました。夕 暮れの道をドライブしておりますと、道路脇に茅葺き屋根のこの宿が立っておりまして、鄙びた たたずまいがなんとも言えず魅力的でした。宿の主人について木の階段を上り、小さな部屋に案内されました。少し殺風景な感じがなきにしもあらずですが、一夜の宿としてはまずまずでしょう。夕食はすませたかという主人の問いに、私は部屋にサンドイッチを運んでくれるように頼みました。味も分量も夕食として申し分のないサンドイッチでした。が、やがて、一人で部屋にいることにも飽き、なんだか落ち着かない気分になってきましたので、階下のバーでこの地のりんご酒でも試してみようと思い立ちました。¹⁵

映画 "スターウォーズ・エピソードIV" (新たなる希望) (1977) でハリソン・フォードの演じる ハン・ソロ達のたまり場になっている酒場も似たようなものか。 さて、その昔の居酒屋の姿を今日ま で伝えている場所がロンドンにある「ジョージ亭」である。 16 この「ジョージ亭」、1666 年のロンドン大火の翌年に再建されているわけだが、こういった馬車を利用しての旅が中心であった時代の宿屋 (居酒屋) は 19 世紀の鉄道の発達と共に寂れていくのである。 17 チョーサーの「陣羽織亭」も住民の 反対にも係わらず 19 世紀後半に取り壊された。

歴史家であり古物研究家であった John Stow (c.1525-1605) は、1598 年に出版した Survey of London に当時のロンドンの地図を描いているが、サザークに Tabard Inn (「陣羽織亭」) を認めることができる。この「陣羽織亭」の名前の由来については、次のように書いてある。

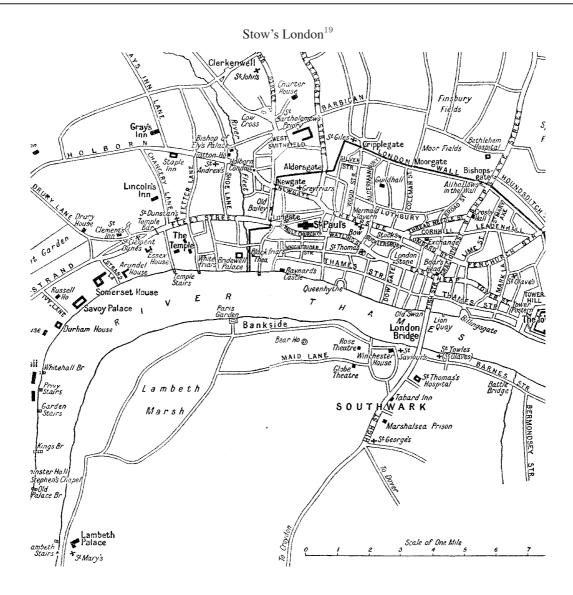
From thence towards London bridge on the same side, be many fayre Innes, for receipt of trauellers, by these signes, the Spurre, Christopher, Bull, Queenes head, Tabarde, George, Hart, Kinges Head, &c. Amongst the which, the most auncient is the Tabard, so called of the signe, which as we now tearme it, is of a Iacquit, or sleeuelesse coat, whole before, open on both sides, with a square coller, winged at the shoulders: a stately garment of old time, commonly worne of Noble men and others, both at home and abroad in the warres, but then (to swit in the warres) their Armes embroidered, or otherwise depict vpon them, that euery man by his coate of Armes might be knowne from others: but now these Tabardes are onely worne by the Heraulds, and be called their coates of Armes in seruice: for the Inne of the Tabard, *Geffrey Chaucer* Esquire, the most famous Poet of England, in commendation thereof writeth thus.¹⁸

¹⁵ カズオ・イシグロ著 土屋政雄訳『日の名残り』p.184 (中公文庫 1993 年)

¹⁶ http://www.pubs.com/pub_details.cfm?ID=187 註の3には1383年という年号が見られるが、現在では1388年が通説となっている。

Peter Haydon The English Pub A History pp.33-34 Robert Hale, 1994

¹⁸ H.B.Wheatley (ed) Stow's Survey of London p.62, Everyman's Library J.M.Dent & Sons 1965 現代語訳は臼田 昭著『イン イギリスの宿屋のはなし』pp.19-20 (「ロンドン橋に向けて、片側に多くの立派な旅籠が並び、旅人を迎える。その屋号は、『スパー』(拍車)、『クリストファー』。『ブル』(牡牛)、『クィーンズ・ヘッド』(女王の頭)、『タバード』(陣羽織)、『ハート』(鹿)、『キングズ・ヘッド』(国王の頭)などなどである。この中でももっとも古いのは『陣羽織』で、屋号は看板に由来する。いまの言い方亜では、上着というか、袖なしの上着というべきもので、前開きなしで、両脇が開き、両肩に肩当てがついている、昔のいかめしい衣装で、貴族などが、家でも、また戦場に出たときにも、着たものだ。だが、その場合(つまり戦場に出た場合)には、それぞれ自分の紋どころを刺繍などでその上に表し、その図柄で他人と区別してもらうのだ。が、現在では、こういう陣羽織を着るのは、伝令官だけで、それは彼らの制服と呼ばれている。」) 駸々堂 1986



Arthur Joseph Munby (1828-1910) という人物がいた。彼は、詩人であり、公務員でもあったのだが、彼は日記を残していた。「陣羽織亭」を探しに歩いたという記述があるが、1875 年に取り壊されたと日記を編集した Derek Hudson は書いている。 20

5. カンタベリーへの巡礼の旅、Travel は Travail なのだ 21

- 790 Lordynges, quod he, now herkneth for the beste,
- 791 But taak it nought, I prey yow, in desdeyn.
- 792 This is the poynt, to speken short and pleyn,
- 793 That ech of yow, to shorte with oure weye,

¹⁹ H.B.Wheatley (ed.) Stow's Survey of London p. xv Everyman's Library 1965

Derek Hudson Munby Man of two Worlds The Life and Diaries of Arthur F. Munby 1828-1919 p. 266-267 John Murray,
1972

²¹ "travail", "travel"寺澤芳雄(編集主幹)『英語語源辞典』pp. 1457-1458 研究社 1997

- 794 In this viage shal telle tales tweye,
- 795 To Caunterburyward I mene it so,
- 796 And homward he shal tellen othere two,
- 797 Of aventures that whilom han bifalle.
- 798 And which of yow that bereth hym best of alle-
- 799 That is to seyn, that telleth in this caas
- 800 Tales of best sentence and moost solaas-
- 801 Shal have a soper at oure aller cost,
- 802 Heere in this place, sittynge by this post,
- 803 Whan that we come agayn fro Caunterbury.

「陣羽織亭」に集った面々、宿の主人の提案に一も二もなく賛成してしまいます。翌朝、夜が明けるや否や出発いたします。聖トマスという小川のところで、話す順番を決める籤を引きます。一番の籤は騎士が引き当てるのです。

当時団体旅行が安全であったのは言うまでもない。 22 ここでもエドワード・ラザファードの『ロンドン』の第9章から。

「そこに男が座ってるでしょう?」デイム・バーニクルはそう囁いて、店の向こうの隅に座っている浅黒い顔の背の高い男を示した。男は両脇に女を侍らせ、エールを飲んで舌つづみを打っている。「いつも女と一緒よ。何者だか知ってる?追いはぎ。ケント州に向かう巡礼者を襲ってるらしいわ。五年後にはどうなってると思う?絞首台にぶらさがってるわよ。まちがいないわね。だからあんたは正直者のままでいなさい。そうすれば大丈夫よ。」²³

Condon Rochester KENG

Route of Canterbury Pilgrims

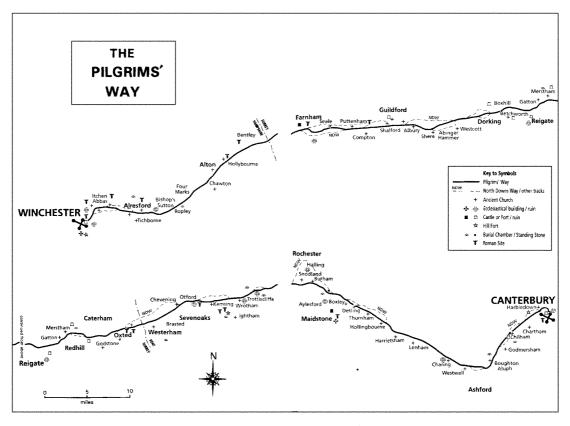
カンタベリーへの巡礼の道24

²² 加島 前掲書では Ken Follett *The Pillars of the Earth* 1989 (『大聖堂』新潮文庫) を利用した。

²³ エドワード・ラザファード著 鈴木主税・桃井緑美子訳『ロンドン』(上) 465 ページ集英社

²⁴ Albert C. Baugh (ed.) *Chaucer's Major Poetry* p.229 Prentice Hall, 1963

「陣羽織亭」からカンタベリーまで約88キロ。片道4日の旅程であった。現在、鉄道ではカンタベリー・イースト駅行きはロンドン・ビクトリア駅から約1時間30分。カンタベリー・ウェスト駅行きはロンドン・チャリング・クロス駅、ウォータールー駅から約1時間50分。長距離バスはロンドン・ビクトリア・コーチ・ステーションから約2時間。 25 一方、「聖なる殉教者トーマス・ベケット」の所でも触れたが、ベケットが元々はフランスの出で、国王ヘンリー2世と対立した際にフランスに迫害を逃れて逃げたことで、フランスからの巡礼者も数多くいた。彼らは、船でSouthamptonに入り、Winchesterからカンタベリーへ向かう120マイル11日間の旅であった。 26



カンタベリーへの巡礼の道27

²⁵ 志子田光雄・志子田富壽子によれば、ロンドのビクトリア・コーチ・ステーションから路線バスを利用すると、昔の道筋を偲ばせるルートを走るとのこと。『イギリスの大聖堂』pp.37-38 晶文社 1999

²⁶ 例えば、Christopher Martin The Pilgrims' Way from Winchester to Canterbury Canterbury Press, 1999

H. Belloc The Old Road Constable and Company, 1911 も同様の内容である。

²⁷ Christopher Martin *The Pilgrims' Way from Winchester to Canterbury* pp. vi-vii Canterbury Press,1999



中世の面影を持つ町・背後には大聖堂

6. チョーサー (2)

Melvyn Bragg は、その著 The Adventure of English (邦訳『英語の冒険』)でチョーサーを新生イングランドの最初の文学者と表している。彼がチョーサーを取り上げたのは、『カンタベリー物語』の登場人物にイギリスの姿を描き出した、つまり、今でも我々の周囲にいるような人を登場させただけでなく、彼が新しい英語、つまり中英語でその作品を書いたからである。当時の言語状況では、ラテン語やフランス語を使った方が高い評価を受けたであろうが、チョーサーは自分自身の言葉であるロンドン英語を使用したということである。Melvyn Bragg はカンタベリーへの巡礼者を紹介する「総序」で、「英語を使ってチョーサーはイギリスで最初のナショナル・ポートレート・ギャラリーを作ったのだ。」と書いている。²⁸

混乱する言語状況の中から英語は標準英語の誕生へとつながる。

チョーサーは 1374 年から 1386 年まで、ロンドン港で羊毛、皮革、ワインなどの関税や特別税の検査官をしていた時に済んでいたのは、オールドゲイトの門楼だった。その窓からは活気に満ちた市内を見下ろすことができた。²⁹ 標準英語の誕生から確立までの中で、重要な役割を果たしたのが英語を使う庶民の地位の向上が上げられる。当時黒死病の流行も労働者、つまり庶民の地位があがる原因となっ

²⁸ Malvyn Bragg *The Adventure of English* pp.66-70 Arcade Publishing, 2003

²⁹ Chaucer's lodgings, which came with the customs position, were delightful. They stood beside the Aldgate entrance to the city in the eastern wall, a few hundred yards from the Tower, and they included a large and handsome room over the gate itself, with a splendid view towards open fields down the straight old Roman road towards East Anglia. Edward Rutherfurd *London* p.460, The Ballantine Publishing Group, 1997

た。その黒死病の流行で混乱するロンドン市内の様子もチョーサーは門楼から見ていたに違いない。 さて、イギリスの小説家エドワード・ラザファードの小説『ロンドン』の一部を引用したり、註に 示したりしたが、最後に、チョーサーが『カンタベリー物語』を描く決心を友人に伝える場面を紹介 して、この小論を終えることにする。図らずもその場面は、複雑な当時の言語状況を紹介することと なっている。時は 1386 年のことであった。

The two men had paid a visit to Bocton, where Bull's brother had welcomed them with his family, and it was as they rode in the warm spring sun down the Canterbury road the following morning that Chaucer broached his idea.

"It's an idea for a huge new work," he explained. "I've written so much conventional courtly verse. But for a long time now I've wanted to try something completely different. Look at all these folk we've been seeing day by day in court. The yeoman, the millers, the friars, the fishwives. What if I could let them speak, as well as the courtly folk." He grinned. "A great big work, a huge stew, a feast."

"But how do you make the speech of the common folk into a poem" Bull objected.

"Ah," Chaucer cried, "I thought of that. What if each one of them told a tale, a little story like the Italian author Boccaccio uses. As they tell the stories, they also reveal themselves. Don't you see the neatness of it?"

"Except that common folk don't sit around telling stories like lazy courtiers," Bull remarked.

"Oh, but they do," his friend responded. "They do it when they travel together. And when do men and women of all conditions travel together, my dear Bull? On this very road." He laughed aloud. "Pilgrims, Bill. Pilgrims setting out from taverns like the George or the Tabard on their way to Becket's all together. I shall call it the Canterbury Tales."

チョーサーが生涯をかけた仕事³¹と称する「カンタベリー物語」を書こうと友人に伝える場面である。話はさらに続き、友人のブルはこの作品はチョーサーの最高傑作になるだろうから、一つ願いを聞いてくれと訴える。「もちろん、そうする。」と答えるチョーサーは「どんなことだ?」と問う。友人は次のように答える。「ラテン語で書け。」と。

チョーサーと同時代の詩人で John Gower (1325/30-1408) がいる。彼は Richard II の寵愛を受けた桂 冠詩人である。彼の墓はテムズ川南岸の Southwark Cathedral にある。彼の頭は 3 冊の本を枕にしている。一冊はラテン語の本、一冊はフランス語の本、そしてもう一冊は英語の本である。当時の言語状況を物語る資料であるが、その後チョーサーの友人の杞憂はどうなったか。友人のブルとチョーサーは次の会話をその後続けるのだ。

"...aristocrats were just likely to switch to French or learned men to Latin when they conversed. And even London English was constantly changing. "It's changed since I was a boy," Bull reminded his friends.

³⁰ Edward Rutherfurd *London* pp.526-527, The Ballantine Publishing Group, 1997

³¹ Edward Rutherfurd op. cit. p.527, The Ballantine Publishing Group, 1997

"I dare say my own grandchildren will hardly understand your verses. Latin is best, "Bull urged, "because it is eternal." Men all over Europe read and spoke it and, it could safely be assumed, would always do so. "You are like a man," Bull said, "throwing himself into a river and swimming when he should be building a noble bridge of stone. Don't let your life's work be swept away. Leave a monument, for future generations."



John Gower の墓(Southwark Cathedral)



枕にしている三冊の本

ラテン語の Vox Clamantis (野に呼ばわる者の声) フランス語の Speculum Meditantis (黙想者のかがみ) 英語の Confessio Amantis (恋人の告白)

 $^{^{\}rm 32}$ Edward Rutherfurd $op.\ cit.$ p.527, The Ballantine Publishing Group, 1997